

インプット学習とアウトプット学習の融合による英語総合能力の伸長  
 Promoting Global English Proficiency Through  
 Integrating Input Learning and Output Learning

村野井 仁(東北学院大学)

Hitoshi Muranoi (Tohoku Gakuin University)

キーワード：インプット仮説、アウトプット仮説、音声英語聴取能力、口頭英語表現能力、  
 T-ユニットに対する平均単語数

本研究では、英語を外国語として学習する日本人大学生が短期間集中的に英語のインプットを受け、そのインプットに関連するアウトプットを自主的に産出する機会を得られるような学習方法を提案し、その学習方法が英語総合能力(global English proficiency)にどのような効果を及ぼすかを学習以前と以後の聴取能力及び口頭表現能力を比較することによって検証する。

本研究の背景となる言語習得理論はインプット仮説とその補完的性格を持つアウトプット仮説である。前者は理解可能なインプットを大量に浴びることによって言語獲得装置が機能し言語習得が進められるという立場を取り(Krashen, 1982, 1984)、後者はインプットを受けることに加えて、アウトプットを産出する機会を得ることが、中間言語文法の仮説検証、再構築などの認知過程の促進に欠かすことができないという立場を取る (Higgs & Clifford, 1982; Swain, 1985, 1995; Pica, 1992)。本研究では、この二つの理論の有機的融合の試みとして、日本人英語学習者に一定量のインプットを与え、その内容に対して英語でアウトプットを産出する機会を集中的に与える指導方法を提案する。学習者には10分程度の長さのインタビューやスピーチが14本録音されたテープ(C-90 2本)、英語スクリプト、日本語訳、内容に関する質問などを含んだ学習教材のパッケージが与えられる。学習者は1ヵ月の間、テープに録音されたこれらの英語をインプットとして吸収し、与えられた質問にしたがってアウトプットを産出する練習を行う。この際、次のステップに従うよう指導する：(1)タイトル、話し手についての情報・内容についての質問(日本語)を読み、内容を予測する；(2)スクリプトを見ずにテープを聴く；(3)英語スクリプトの中で下線を施された重要語の意味を確認する；(4)文字を見ずにテープを聴く；(5)日本語スクリプトをスキミングする；(6)文字を見ずにテープを聴く；(7)英語スクリプトをスキミングする；(8)文字を見ずにテープを聴く；(9)使いこなせるようにしたい表現の整理・分類をする；(10)文字を見ずにテープ聴く；(11)リピーティング(シャドウイング)の練習をする；(12)聴き取った内容についての質問(英文)を読む；(13)質問に答えるためのメモを採る；(14)メモを元に口頭で質問に答える。このような手順で練習を重ねることによって学習者は、言語習得に不可欠な(A)質的・量的に適切なインプット、(B)アウトプットを産出する機会、(C)言語知識を内在化(intake)するための練習、の三つを得ることができると仮定する。

この学習の効果を量的に調べるため、学習者の英語総合能力を学習期間前と後に音声英語理解テスト(リスニング・テスト)と口頭英語表現テスト(オーラル・インタビュー)によって測定し、分析した。

本研究において検証された研究上の問い(research questions)は以下の通り：

## 9月6日(土) 研究発表第6室(16号館307)

- (1) インプット・アウトプット学習を行った学習者は英語総合能力が高まる。  
 (2) インプット・アウトプット学習にかけた時間と英語総合能力の伸びの間には関連がある。

上記の問いに答えるため以下の帰無仮説を検証する：

- H<sub>0</sub>1 音声英語聴取能力に関して、実験群のプリテスト得点とポストテスト得点の間に有意差はない。  
 H<sub>0</sub>2 口頭英語表現能力に関して、実験群のプリテスト得点とポストテスト得点の間に有意差はない。  
 H<sub>0</sub>3 音声英語聴取能力を測るポストテストにおいて実験群と統制群の間に得点上の有意差はない。  
 H<sub>0</sub>4 口頭英語表現能力を測るポストテストにおいて実験群と統制群の間に得点上の有意差はない。  
 H<sub>0</sub>5 音声英語聴取能力テストにおける得点の伸び(posttest scores - pretest scores)と学習者がインプット・アウトプット学習にかけた時間の長さとの間には有意な相関関係はない。  
 H<sub>0</sub>6 口頭英語表現能力テストにおける得点の伸び(posttest scores - pretest scores)と学習者がインプット・アウトプット学習にかけた時間の長さとの間には有意な相関関係はない。

研究手順：

- (1) 被験者：英文学科に在籍する大学2年生30名。統制群15名、実験群15名。実験群の15名は最低学習時間を超えた者(一日平均インプット60分、アウトプット15分の合計75分を一日の最低学習時間と設定)。  
 (2) 学習期間(実験群)：1997年2月17日から3月17日の一ヵ月間(春休み期間中)。  
 (3) テスト：実験群、統制群両方の被験者は指導期間の開始時にプリテスト、終了時にポストテストを受ける。プリテスト、ポストテストともに音声聴解能力と口頭表現能力を測定する。音声聴解能力は短いニュース英語を聞き取り、その内容にあったものを日本語で書かれた選択肢の中から選ぶタスク(15問)によって測定し、口頭表現能力は口頭でなされた10の質問に対し、口頭で答えるインタビュー・テストによって測定する。被験者の全てのアウトプットは録音され、文字化された。口頭表現能力を数量化するため、被験者のアウトプット中の「T-ユニットに対する平均単語数」(average number of words/T-units)を計算し、これを指標とした(Larsen-Freeman,1989)。  
 (4) 分析：テスト・タイプ(音声聴解能力/口頭表現能力)ごとにテスト(プリテスト/ポストテスト)、グループ(実験群/統制群)を要因とした二要因分散分析(2x2 Analyses of Variance)によって分析した。学習時間とテスト得点の相関はピアソン相関係数を用いて分析した。

結果：

表1 音声英語聴解テスト平均点、標準偏差、学習時間

	CONTROL GROUP			EXPERIMENTAL GROUP				
	Pretest	Post-test	Gain score	Pretest	Post-test	Gain score	Length of Study (hrs) (Exp. Group Only)	
Mean	7.20	6.93	-0.27	Mean	7.67	8.93	1.27	38.87
SD	1.56	1.57	2.35	SD	2.70	2.89	2.41	23.40

表2 口頭英語表現能力テスト平均点、標準偏差、学習時間

	CONTROL GROUP			EXPERIMENTAL GROUP			
	Pretest	Post-test	Gain score	Pretest	Post-test	Gain score	Length of Study (hrs) (Exp. Group Only)
Mean	6.39	6.33	-0.05	Mean 6.93	7.50	0.57	9.27
SD	1.36	1.25	1.03	SD 1.99	1.89	0.94	6.14

表3 分散分析結果(音声英語聴解テスト)

2 x 2 Analysis of Variance [Group (Control x Experiment) x Test (Pretest x Post-test)]

S.V.	SS	df	MS	F
Group	22.82	1	22.82	2.87 n.s.
Sub	222.67	28	7.95	
Test	3.75	1	3.75	1.24 n.s.
Group x Test	8.82	1	8.82	2.91†
S x Test	84.93	28	3.03	
Total	342.98	59		† .05 < p < .10

表4 交互作用 (Group x Test) 分析結果(音声英語聴解テスト)

Analysis of Group x Test Interaction

S.V.	SS	df	MS	F
Group in Pretest (Sub in Pretest:	1.63 145.73	1 28	1.63 5.20)	0.31 n.s.
Group in Post-test (Sub in Post-test:	30.00 161.87	1 28	30.00 5.78)	5.19 *
Test in Control Group	0.53	1	0.53	0.18 n.s.
Test in Exp. Group (S x Test	12.03 84.93	1 28	12.03 3.03	3.97 †

\* p &lt; .05

† .05 &lt; p &lt; .10

表5 分散分析結果(口頭英語表現能力テスト)

2 x 2 Analysis of Variance [Group (Control x Experiment) x Test (Pretest x Post-test)]

S.V.	SS	df	MS	F
Group	10.92	1	10.92	2.04 n.s.
Sub	149.57	28	5.34	
Test	1.01	1	1.01	1.94 n.s.
Group x Test	1.47	1	1.47	2.81 n.s.
S x Test	14.65	28	0.52	
Total	177.63	59		

9月6日(土) 研究発表第6室(16号館307)

表6 一要因分散分析結果(口頭英語表現能力テスト)

- (1) Control Group (Pretest scores x Post-test scores):  $F(1/14) = 0.04$  n.s.  
 (2) Experimental Group (Pretest scores x Post-test scores):  $F(1/14) = 5.20^*$   
 (3) Pretest scores (Control Group x Experimental Group):  $F(1/14) = 0.70$  n.s.  
 (4) Post-test scores (Control Group x Experimental Group)  $F(1/14) = 3.71^{\dagger}$

仮説検証結果:

- H<sub>01</sub> 音声英語聴取能力に関して、実験群のプリテスト得点とポストテスト得点の間に有意差はない。(有意傾向が見られた,  $F(1/28) = 3.97$ ,  $.05 < p < .10$ )  
 H<sub>02</sub> 口頭英語表現能力に関して、実験群のプリテスト得点とポストテスト得点の間に有意差はない。(棄却、有意差あり,  $F(1/14) = 5.20$ ,  $p < .05$ )  
 H<sub>03</sub> 音声英語聴取能力を測るポストテストにおいて実験群と統制群の間に得点上の有意差はない。(棄却、有意差あり,  $F(1/28) = 5.19$ ,  $p < .05$ )  
 H<sub>04</sub> 口頭英語表現能力を測るポストテストにおいて実験群と統制群の間に得点上の有意差はない。(有意傾向が見られた,  $F(1/14) = 3.71$ ,  $.05 < p < .10$ )  
 H<sub>05</sub> 音声英語聴取能力テストにおける得点の伸び(posttest scores - pretest scores)と学習者がインプット・アウトプット学習にかけた時間の長さとの間には有意な相関関係はない。(棄却、負の有意な相関あり;  $r = -.565$ ,  $dfs = 1/13$ ,  $F = 6.09$ ,  $p < .05$ )  
 H<sub>06</sub> 口頭英語表現能力テストにおける得点の伸び(posttest scores - pretest scores)と学習者がインプット・アウトプット学習にかけた時間の長さとの間には有意な相関関係はない。(支持、有意な相関なし;  $r = -.174$ ,  $dfs = 1/13$ ,  $F = .41$ , n.s.)

結論:

実験結果から、今回提案されたインプット・アウトプット学習方法は大学生英語学習者の英語総合能力(音声聴解能力、口頭表現能力)を高めるために効果的であることがあきらかとなった。

インプット・アウトプット学習にかけた時間と英語総合能力の伸びの間の関連については、正の相関関係は見られなかった。

本実験の問題点及び今後の課題:

- 1) 実験群は高い動機付けを持っている学習者によって構成されており、今回実験した学習方法が動機付けの低い学習者に対しても効果があるかどうかを確かめる必要がある。
- 2) 極端に多くの時間を学習に割いた2名の学習者の点数が伸びておらず、これが学習時間と点数の伸びとの負の相関を導いたわけであるが、なぜこのような結果が生じたのか調査する必要がある。
- 3) 今回用いた英語能力測定方法(テスト)は実用性を重視することによって選択されており、より信頼性及び妥当性の高いテストによって今回の実験結果を追証する必要がある。
- 4) インプットとアウトプットに加え、インターアクションする機会も得られるような長期自主学習方法の提案を今後の課題とする。